

教科	科目	学年	単位数	使用教科書	主な使用補助教材
地理歴史	世界史探究	2	2	詳説世界史(山川出版社)	グローバルワイド最新世界史図表(第一学習社)

1 科目の目標と評価の観点

目標	社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を育成することを目指す。			
評価の観点	知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度	
	世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解しているとともに、諸資料から世界の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。	世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる事象の意味や意義、特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現代世界とのつながりなどに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。	世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に探究しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の歴史に対する愛情、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。	

2 学習計画と観点別評価基準

学習内容	学期	学習のねらい	観点別評価基準		
			知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
第1章 文明の成立と古代文明の特質 1．文明の誕生	1学期 (24)	①人類の歴史と国際商品として流通したアジア原産の作物を例として、世界史を学ぶ意義や技法を学ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ・人類の歴史は地球上の生命の歴史のなかではほんの一瞬であること、そして人類は多くの道具や技術を生み出してきたことを理解し、整理できる。 ・私たちの生活のなかで当たり前のように存在している食材について、それらがどこを原産地とし、どこで栽培されるようになり、どのように全世界に普及したのかを整理できる。 ・人類が農耕・牧畜を開始して国家を形成することになった要因を理解し整理できる。 ・人類を区分する人種・民族・語族の根拠を理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人類の歴史は単線的ではなく、いくつかの可能性があったなかで、環境に適応できた種のみが生き残ってきたことを考察している。 ・世界商品として流通した砂糖・茶・コーヒーが、どのような人々によって生産され、どのような人々が消費し、どのような人々がその利益を得たのかを考察している。 ・都市化が進んだことが、なぜ国家の形成に結びつくのか考察している。 ・人類を区分する基準が、負の側面も持っていることを考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文明以前の人類の歴史を、歴史学以外の分野の理論や成果を理解し、活用しながら多面的に追究しようとしている。 ・人々の生活に潤いをもたらす世界商品の生産・流通・販売について、その問題点と解決のための視点を探究しようとしている。 ・都市化によって古代文明の形成が進んだが、都市化をともなわないが文化を形成した地域も存在するなど、古代文明の多様性について探究しようとしている。
第1章 2．古代オリエント文明とその周辺		①世界各地で独自に形成され発展してきた古代文明に共通する特徴を考える。 ②気候や風土などの自然環境が古代文明の形成にどのように役だったか考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・メソポタミアとエジプトで発展した古代文明の基本的知識を身につけ、その歴史的意義を理解している。 ・古代オリエント世界の影響を受けたシリア・パレスチナ地方やエーゲ海周辺の基本的知識を身につけ、その歴史的意義を理解し整理できる。 ・メソポタミアとエジプトの特質を比較できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・メソポタミアとエジプトの神権政治の特質を理解し、その違いが生まれた背景を考察している。 ・メソポタミアの六十進法など古代文明の発明が、現在の私たちの生活にまで影響をおよぼしていることを考察している。 ・シリア・パレスチナ地方とエーゲ海周辺の神権政治の特質を理解し、古代オリエント世界の神権政治と比較して考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・メソポタミアとエジプトの古代文明がその後の歴史に与えた影響を探究しようとしている。 ・シリア・パレスチナ地方やエーゲ海周辺で発展した古代文明が東西諸民族の文明形成に与えた影響を探究しようとしている。
第1章 3．古代の南アジアの古代文明			<ul style="list-style-type: none"> ・インダス文明が他の文明と同様に高度な都市文明を築いていたことを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・南アジアの王朝の展開を理解し、王朝の興亡と多様な宗教のつながりを多角的に考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・南アジア諸国家では、バラモン教やカースト制度などが社会の基盤になっていることを探究しようとしている。
第1章 4．中国の古代文明			<ul style="list-style-type: none"> ・東アジアの自然が中国、ベトナム、朝鮮、日本の国家形成に与えた影響を理解し整理できる。 ・黄河流域と長江流域の文明の背景、特徴を理解している。 ・中国初期王朝の特徴を理解し、漢字が国家の建設・運営に与えた影響を理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・殷・周時代に発達した神権政治の特徴について、他の文明と比較しながら考察している。 ・初期王朝において王のあり方がどのように変化したのか考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・南アジア諸国家では、バラモン教やカースト制度などが社会の基盤になっていることを探究しようとしている。 ・東南アジアやオセアニアでは、人々の活発な活動が社会の基盤になっていることを考察しようとしている。
第1章 5．南北アメリカ文明			<ul style="list-style-type: none"> ・南北アメリカのマヤ・アステカ・インカなどの諸文明について、その変遷と特質について理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・南北アメリカの古代文明と他の大陸の古代文明の共通点・相違点を考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・南北アメリカ大陸の古代文明は他の大陸との交渉がないなかで、独自の文明を形成したことを探究しようとしている。
第2章 中央ユーラシアと東アジア世界 1．中央ユーラシア——草原とオアシスの世界		①中央ユーラシアからおこった遊牧国家と、中国の諸王朝との関係はどのようなものだったか理解する。 ②殷・周王朝と秦・漢帝国の統治方法の違いを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・のちの中華帝国の原型となる秦漢帝国で形成された華夷思想、儒学と政治、歴史書の編纂の基本知識を理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・皇帝、儒学、歴史など中国文明の重要な要素が出現した意義を、3つのコラムを利用して考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・秦漢帝国の成立以来、中国の皇帝政治が2千年以上も続いた背景・理由を探究しようとしている。
第2章 2．秦・漢帝国			<ul style="list-style-type: none"> ・遊牧国家を形成したスキタイや匈奴の文化・政治・外交の基本知識を理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内陸ユーラシアの遊牧民とオアシス民が共生共存してきた背景を、2つの資料を活用して考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊牧国家と農耕国家は歴史上どのような関係性にあったのかを探究しようとしている。

学習内容	学期	学習のねらい	観点別評価基準		
			知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
第2章 3. 中国の動乱と変容			・華北には遊牧民が進出して新しい制度を中国社会に定着させる一方、江南ではその後の中国文化に影響を与える文化が形成されたことを理解している。	・魏晉南北朝時代の政治経済の変化や中国と周辺国家の形成の関係をコラムを活用して表現している。	・北方遊牧民の王朝と江南の漢族王朝の対立と交流の歴史が、中国の政治・経済・文化に与えた影響を探究しようとしている。
第2章 4. 東アジア文化圏の形成			・律令制度や唐の広域支配の内容、隋唐文化や唐代後半の制度改革について理解し整理できる。 ・隣接諸国家が隋唐帝国の影響を受けて整備した政治制度や文化について理解している。	・隣接諸国家が唐帝国の政治制度や文化を取り入れて国家体制を整備することで東アジア文化圏が形成されたことを考察している。 ・唐帝国の国家体制が8世紀以降、変化していく背景を考察している。	・遊牧民と漢族の融合が進んだことが、隋唐帝国の成立にどのような影響を与えたのか探究しようとしている。 ・日本などの隣接諸国家は、唐との公式な国家間交流だけではなく、民間の交流も通じて国家形成に取り組んでいたことを探究しようとしている。
第3章 南アジア世界と東南アジア世界の展開 1. 仏教の成立と南アジアの統一国家 2. インド古典文化とヒンドゥー教の定着 3. 東南アジア世界の形成と展開		①南アジアで生まれた宗教の特質と周辺諸地域に拡大する様相をまとめる。	・南アジアの社会の形成に関して、宗教と交易が大きな役割を果たしたことを理解している。 ・東南アジアの古代社会に関して基本的な知識を身に付けている。 ・東南アジアでは海上だけではなく陸上でも交易や移動を通して外の世界とつながっていたことを理解している。	・古代統一国家の形成と発展に仏教やヒンドゥー教の果たした役割を考察している。 ・クシャーナ朝からグプタ朝にかけて古典文化が集大成された背景や意味を考察している。 ・東南アジアでは東アジアや南アジアとの海上交易活動を通じて特色ある社会を形成したことを考察している。 ・東南アジアの大陸部ではヒンドゥー教から上座部仏教へ、諸島部ではヒンドゥー教から大乘仏教へ信仰が変化していった経緯を考察している。	・南アジアに形成されたバラモン教やヴァルナ制度が、仏教などの影響を受けながらヒンドゥー教やカースト制度へ発展し、この地域にまとまりを与える基盤となったことを探究しようとしている。 ・東南アジアでは、人々の活発な活動が社会の基盤になっていることを考察しようとしている。 ・中国の影響を強く受けた大陸部と、インドの影響を強く受けた諸島部では形成された地域社会に違いが生まれたことを探究しようとしている。
第4章 西アジアと地中海周辺の国家形成 1. イラン諸国家の興亡とイラン文明		①アケメネス朝の統治と後世への影響を考える。 ②ギリシアのポリス社会での政治・経済・文化の発展を理解する。 ヘレニズム時代の政治文化とそれ以前のギリシアの政治文化の違いを考える。	・古代西アジアに形成された王朝の統治方法やその領域の広がり、そこで信仰された宗教の特徴を理解している。 ・西アジア世界は東西交易の中継地域としての役割と東西文化の交流地域としての役割を果たしていたことを理解している。	・アケメネス朝やササン朝が、アッシリアやアレクサンドロス大王の帝国よりも長期間にわたって存続した理由や背景を考察している。 ・古代西アジアに生まれた宗教が、その後、世界に広まって各地に影響を与えたことを考察している。	・アケメネス朝やササン朝の伝統的イラン文化が、東西交易を通じた文化交流によって、東アジア世界の文化に影響を与えたことを探究しようとしている。
第4章 2. ギリシア人の都市国家			・古代ギリシアの人々の経済活動と政治活動について、ポリス社会の視点からその特徴を理解している。 ・対外戦争と内戦を経験したことで、ポリス社会や政治体制におきた変化を理解し整理できる。 ・ヘレニズム時代にギリシア世界が統一され、ポリス社会が大きく変化したことを理解している。 ・ヘレニズム時代に発達した文化の特徴を、古代ギリシア文化と比較して理解している。	・古代ギリシアで民主政治が生まれ、それが衆愚政治へと変化していく背景を考察している。 ・古代ギリシアではアテネのような民主政以外にも異なる政治体制が存在するなどの多様性のある社会であったことを考察している。 ・ヘレニズム世界でポリス社会にもとづく価値観が失われ、ポリスをこえた思想が登場した背景を考察している。 ・ヘレニズム世界はギリシアから西アジア全域に拡大していくが、その影響力はどこまでおよんでいたのか考察している。	・ヘレニズム時代に生まれた世界帝国や新しい思想が、西アジアやローマ帝国に与えた影響を探究しようとしている。
第4章 3. ローマと地中海支配			①ローマが広大な大帝国を成立させることができた理由を考える。 ②ギリシア文化とローマ文化を比較する。 ③ローマがギリシアと異なり、共和政下でも貴族が主導権を握り続けた理由を考える。 ④ローマ帝国でキリスト教が公認された理由を考える。	・都市国家ローマで展開された身分闘争の内容を理解している。 ・都市国家から帝国へと変化していくなかで、平民のおかれた環境、貴族のおかれた環境を理解し、貴族が内乱をおこした背景を理解している。	・ローマが都市国家から帝国へと拡大していくなかで、共和政の形式を維持していた背景を探究しようとしている。 ・軍役の義務を果たすことが平民にどのような効果をもたらしたのか、平民の視点で探究しようとしている。
			・後期帝政の特徴を前期帝政と比較しながら理解している。 ・ローマ皇帝がキリスト教保護に方針を転換し、教義形成を主導したことを理解している。 ・ゲルマン人はローマ帝国領への侵入を繰り返しながら定住し、ローマ社会を変化させたことを理解している。	・「ローマの平和」以降、ローマ帝国の分裂状態への対応のなかで後期帝政が形成されたことを考察している。 ・ローマ帝国や皇帝にとってキリスト教の意味や影響力が変化し、積極的に統治に利用していった背景を考察している。	・ローマ帝国が拡大から縮小に転じるなかで、ゲルマン人が征服の対象から帝国の重要な構成員に変化していった理由を探究しようとしている。 ・キリスト教の教会内部の考え方の違いが克服された経緯や背景を探究しようとしている。
第4章 4. キリスト教の成立と発展			・前期帝政の特徴と「ローマの平和」と呼ばれた統治の内容を理解している。 ・ギリシア文化の模倣から始まったローマ文化が独自に発達したことや、キリスト教が迫害を受けながらもローマ市民に受け入れられたことを理解している。	・ローマ帝国の拡大は、軍隊による戦争だけではなく、ローマ市民権を与えることで「ローマ人」世界が広がることも影響していたことを考察している。 ・イエスが始めた新しい教えが、ユダヤの民族宗教の枠をこえて帝国内に広まり、世界宗教へ発展した背景を考察している。	・都市国家から帝国に発展したローマが貴族政、民主政、独裁政を融合した独特の支配体制を構築できた理由を探究しようとしている。 ローマ文化やキリスト教がローマ世界をこえる普遍性をもった理由を探究しようとしている。

学習内容	学期	学習のねらい	観点別評価基準		
			知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
第5章 イスラーム教の成立とヨーロッパ世界の形成 1. アラブの大征服とイスラーム政権の成立		①古代のオリエント世界やヘレニズム世界で形成された宗教がイスラーム教に与えた影響を考える。 ②イスラーム勢力が急速に拡大した原因を考える。 ③ゲルマン人などの移動がヨーロッパの形成に与えた影響を考える。 ④現代のヨーロッパは政治的文化的に大きく東西に分かれるが、その歴史的背景を考える。	・都市メッカの特徴やムハンマドの生い立ちなどから、イスラーム教が創始された背景について理解している。 ・正統カリフ時代、ウマイヤ朝、アッバース朝と時代が進むなかで、ムスリム政権の性格がどのように変化していくのかについて理解している。 ・ムスリム以外の人々がムスリム政権下でどのような立場にいたのかについて理解している。	・キリスト教など他の世界宗教と比較しつつ、イスラーム教が政教一致の教団国家を形成した理由について考察している。 ・ムスリムによる征服活動が順調に進み大帝国を建設した理由について考察している。 ・ギリシア、ペルシア、インドなどの先行文明がどのようにイスラーム文化に取り入れられたのかについて考察している。	・現代におけるイスラーム教の重要性を意識しながらその起源や発展について探究しようとしている。 ・イスラーム世界が非アラブ人や非イスラーム教徒を包摂して発展した、多様性をもった地域であることを追究しようとしている。
第5章 2. ヨーロッパ世界の形成			・アルプス山脈を境に、ヨーロッパの南北が地理的に異なっていることについて理解している。 ・フランク王国が他のゲルマン系部族と対照的に、カトリック教会との結びつきを強めたことについて理解している。	・短命に終わった他の王国と対照的にフランク王国が存続できた理由について考察している。 ・ユスティニアヌス1世の政策に対して、古代ローマ帝国の再興という視点から考察している。	・ヨーロッパ世界の歴史を、地理的側面から探究しようとしている。 ・ヨーロッパの東西それぞれでの古代との連続性や断絶について探究しようとしている。 ・現代ヨーロッパ諸国の起源について探究している。
			・聖画像問題によりビザンツ皇帝と教皇の対立が深まるのと並行して、教皇とカロリング家が関係を強めたことについて理解している。 ・カール大帝の帝国の統治体制の特徴について理解している。 ・9世紀におけるフランク王国分裂の経緯と、ノルマン人らの移動が分裂後の各王国にどのような影響を与えたのかについて理解している。	・東ローマ帝国においてギリシア的要素が色濃くなり、ビザンツ帝国に移行したことについて考察している。 ・キリスト教を基盤とする西欧世界の形成に対し、ムスリム勢力の地中海進出がどのように影響したのかについて考察している。 ・ノルマン人の移動について、西欧だけでなく東欧や地中海方面まで視野に入れて考察している。	・フランク王国（カロリング朝）とカトリック教会の結合がキリスト教世界としてのヨーロッパの基盤となったことについて探究しようとしている。 ・封建制の成立などに対するノルマン人の移動の影響の大きさについて、探究しようとしている。
第6章 1. イスラーム教の諸地域への伝播 2. 西アジアの動向		①イスラーム教の拡大におけるトルコ系民族の歴史的役割を考える。 ②諸地域におけるイスラーム受容の動向と、地域ごとのイスラーム社会の特質を考える。	・遊牧を生業としていたトルコ系民族が軍勢力として重用され、勢力を拡大したことを理解している。 ・哲学、医学、歴史学などの各分野で多くのイスラーム文化人が活躍したことを理解している。	・馬上からのすぐれた攻撃が各王朝でトルコ系遊牧民が重用された要因であることを表現しようとしている。 ・スーフィーによる聖者崇拜や演舞を取り入れた布教など柔軟な対応がイスラーム拡大の要因となったことを考察している。	・資料から、マムルークの進出とイスラーム勢力の拡大がほぼ軌を一にしていることを探究しようとしている。 ・インド地域において、スーフィーの影響を受けて新たなヒンドゥー教が生まれたことを探究しようとしている。
第7章 1. 西ヨーロッパの封建社会とその展開 2. 東ヨーロッパ世界の展開		①中世ヨーロッパはローマ帝国を引き継ぐ神聖ローマ帝国と英仏のような君主国からな独自の政体を生み出したが、その原因を考える。 ②十字軍が関係する諸地域の政治情勢や社会のあり方との関わりを比較する。 ③11・12世紀の都市の成立と成熟が都市や農村での生産活動や商人の国際的な交易活動とどのように結びついたか考える。 ④ビザンツ帝国と周辺のスラヴ人の世界について、西ヨーロッパと比較して独自性を考える。 ④14世紀以降、危機に襲われたヨーロッパが再び再生し、発展した理由を考える。	・神聖ローマ帝国の帝国教会政策と11世紀の教皇座の改革の2つがどの点で衝突するのかについて理解している。 ・11世紀後半のビザンツ帝国をめぐる状況や当時の教皇座の思惑などから、十字軍がなぜ開始されたのかについて理解している。	・ユスティニアヌス1世期と比較しつつ、なぜ10～11世紀がビザンツ帝国の最盛期とされるのかについて考察している。 ・叙任権闘争において、教皇権と皇帝権がそれぞれどのような状況下で闘争に臨んでいたのかについて考察している。 ・この時期のイタリア諸都市をめぐる諸問題について考察している。(例)第4回十字軍においてヴェネツィアが果たした重要な役割。	・十字軍について、当時の西欧の社会や経済状況から探究しようとしている。 ・地中海世界が繁栄するなかで、商業等の主導権がビザンツ帝国からイタリア諸都市に移行したことについて探究しようとしている。
第7章 3. 西ヨーロッパ世界の変容			・ヨーロッパの中世都市がもっていた諸機能や、司教座都市など都市の諸類型について理解している。 ・イングランドで王権と諸侯らが対立した結果、マグナ=カルタが出されたことを理解している。 ・イベリア半島でレコンキスタがほぼ完了し国家形成が進んだことについて理解している。 ・地中海商業圏と北ヨーロッパ商業圏のそれぞれの、含まれる国、地域や取引される商品の種類について整理し理解している。	・ヨーロッパ各地における植民活動の原因や植民事業のおこなわれ方などについて考察している。 ・シチリア島やトレドを舞台にアラビア語文献のラテン語への翻訳が進められ、それが12世紀ルネサンスの要因となったことについて考察している。 ・都市の基本形態を視野に入れつつ、各地の都市で開催されていた定期市に合わせて移動する商人の動きがネットワーク化されて商業圏が形成されたことについて考察している。	・中世ヨーロッパ世界における都市の重要性について探究している。 ・教皇権と諸君主権の関係について追究しようとしている。 ・軍事的対立にもかかわらず、イスラーム世界との経済や文化面での交流がヨーロッパ世界の発展に寄与したことについて探究しようとしている。

学習内容	学期	学習のねらい	観点別評価基準		
			知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
第7章 4. 西ヨーロッパの中世文化	2 学 期 （ 2 4 ）		<ul style="list-style-type: none"> ・教会大分裂の背景として、カトリック教会内部でのイタリア派とフランス派の対立があったことについて理解している。 ・神聖ローマ帝国内での領邦諸侯の台頭に対し、金印勅書がどのような意義をもつのかについて理解している。 ・領主制の危機や社会秩序の危機など、中世後期の危機の種類について整理しつつ理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・11世紀のカノッサ事件と14世紀のアナーニ事件を比較し、教皇権と世俗王権の力関係がどのように変遷していたかについて考察している。 ・身分制議会の起源と王権との関係が、イギリスとフランスでは対照的であることについて考察している。 ・14世紀からイタリアでルネサンスが進展した背景について、多角的に考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中世ヨーロッパの普遍的存在だった教皇権と皇帝権がともに衰退していたことについて探究しようとしている。 ・当時のヨーロッパ諸国のあり方がどのように近代国家に結びつくのかについて探究しようとしている。 ・ルネサンスの諸成果について当時の状況と結びつけて探究しようとしている。
第8章 1. アジア諸地域の自立化と宋 2. モンゴルの大帝国		①唐宋の変革について周辺民族との外交関係に注目して両王朝を比較する。 ②モンゴル帝国の特徴をまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・遊牧民、狩猟民であった契丹や女真が新たに支配した農耕民に対してどのように対応したかを理解している。 ・宋において士大夫層が科挙を通じて国家の中心となり新たな文化を創出したことを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・10世紀以降契丹、西夏、女真など多くの民族の興亡が繰り返されたことを考察している。 ・宋における士大夫の活躍とそれを支えた新たな思想としての宋学の役割について考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各民族の特徴をつかむことで、漢民族中心の東アジア史とは異なる状況を追究しようとしている。 ・宋において地域経済や庶民文化がめばえ、中国社会の基礎が形づくられたことを追究しようとしている。
			<ul style="list-style-type: none"> ・モンゴル帝国は4つの政体にわかれていたが駅伝網などを通じて統合されていたことを理解している。 ・元朝では各分野で多彩な民族が活躍したこと、ヨーロッパからの来訪者と交流を深めたことを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・領域拡大のなかでキリスト教、イスラーム教、儒教、仏教などを支配下においたことを考察している。 ・元朝では紙幣の流通や海運の発達など都市を中心とした経済の発展が著しかったことを考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マルコ・ポーロの旅行記をもとにモンゴル帝国の政治的、文化的な特色を追究しようとしている。 ・元と宋の文化を比較し、その類似点や相違点を追究しようとする。
定期考査		2			
第9章 1. アジア交易世界の興隆	2 学 期 （ 2 4 ）	①16世紀以前のアジアではどのような人々が交易を担っていたのか理解する。 ②明代初期に形成された東アジア・東南アジアの国際的な秩序の変化を「世界の一体化」との関わりで考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・草原の道がモンゴル高原から黒海北岸に達していたこと、オアシスの道は山岳地帯や砂漠地帯を迂回していたことを理解している。 ・海の道においてムスリム商人が操るダウ船と中国の伝統的帆船が活躍したことを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内陸の通商路ではイラン系やトルコ系の民族が活躍したことを考察している。 ・海上の通商路ではギリシア人やアジアの民族、ムスリム商人やイタリア人などが活躍したことを考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内陸交易において中心となった物産とその主産地について探究しようとしている。 ・海上交易において中心となった物産とその主産地について探究しようとしている。
			<ul style="list-style-type: none"> ・明初の国内政策は民衆に軍役や徭役、税負担などを徹底させるものであったこと理解している。 ・朝貢貿易体制下、琉球などは中継貿易により大きな利益をあげたことを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝貢体制の確立をめざして鄭和の遠征がおこなわれたが、海禁政策により民衆の自由な交易は禁じられたことを考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マラッカの繁栄と鄭和の遠征が深く影響しあっていたことを追究しようとしている。
			<ul style="list-style-type: none"> ・銀が経済の中心となり、日本銀の需要の高まりがポルトガル人の活動を活発させたことを理解している。 ・明朝後期、陽明学の出現やイエズス会による情報伝達により思想界が刷新されていったことを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一条鞭法実施の背景として、現物中心の経済が銀を基盤とした経済へ変化したことを考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝貢体制への反発がモンゴル勢力や倭寇の活動を引き起し、さらに女真隆盛のきっかけとなったことを追究しようとしている。
第9章 2. ヨーロッパの海洋進出とアメリカ大陸の変容		①15世紀頃からヨーロッパの人々がアジア、アフリカ、アメリカに進出する要因を、中世ヨーロッパの状況から考える。 ②ヨーロッパ人の経済活動において重要である銀の動きを調べる。	<ul style="list-style-type: none"> ・当時のヨーロッパで需要のあった東方の物産や、「司祭ヨハネの国」のイメージなどについて理解している。 ・ポルトガルが設置した航路上の交易拠点について、ポルトガルにとってのその地域の役割も含めて理解している。 ・スペインの植民地支配の苛酷さと、それに対するラス=カサスの告発について理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長年続いたレコンキスタや、ジェノヴァとポルトガルの経済的關係などがポルトガルとスペインの海洋進出に影響したことを考察している。 ・ポルトガルとスペインがそれぞれどの方向に進出し、どの地域と交易をおこなったり植民地化したのかについて考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中世ヨーロッパの人々が東方にもっていた漠然としたイメージについて探究しようとしている。 ・著名な航海者や探検家の活動に焦点を当てつつ、ヨーロッパ人の海外進出の特徴などについて探究しようとしている。

学習内容	学期	学習のねらい	観点別評価基準		
			知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
			<div>・ポルトガルやオランダなどのアジアへの進出が政治的支配をともなわなかったことについて理解している。</div> <div>・大西洋三角貿易に関係する諸地域や、貿易で輸出入される主要商品とその流れる方向について理解している。</div> <div>・農場領主制が東欧で発達した背景と経過について、中世の領主制と比較しつつ理解している。</div>	<div>・主要生産地や最終流入先も含め、16世紀以降の銀の世界的な流通の全体像について表現している。</div> <div>・「大西洋世界」を構成する各地域が対等ではなく、ヨーロッパが主導していたことについて考察している。</div> <div>・ヨーロッパを中心に成立した地域間分業の構図と、分業進展による各地域への影響について考察している。</div>	<div>・アジアに進出したヨーロッパ諸国がアメリカと異なり、なぜアジア諸地域の広汎な植民地化ができなかったのかについて探究しようとしている。</div> <div>・アメリカで生産されヨーロッパに輸出されていた商品を取り上げることで、当時のヨーロッパにおける社会や文化の状況がプランテーションの発達とどう関係するのかについて探究しようとしている。</div>

学習内容	学期	学習のねらい	観点別評価基準		
			知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
第10章 アジア諸帝国の繁栄 1. オスマン帝国とサファヴィー朝 2. ムガル帝国の興隆		①ムスリム政権のオスマン朝、サファヴィー朝、ムガル朝の統治の共通点と相違点をまとめる。 ②ムガル朝のヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の関係を理解する。 ③明の支配がおよばなかった領域を清がどのように支配したのか考える。	・オスマン朝は直轄領と間接統治領において異なった支配をおこなうことで安定をはかっていたことを理解している。 ・オスマン朝においてまずアラビア語やペルシア語が、さらにオスマン語が重んじられたことを理解している。	・非ムスリムに対し共同体の設置とジズヤ納入などにより信仰を許したことを考察している。 ・ティマール制解体後、徴税請負制が広がり新たな有力者の出現を引き起こしたことを考察している。	・オスマン朝の支配領域が地中海沿岸からイラク地域まで広がっていたことを探究しようとしている。 ・オスマン朝の官僚制における各グループについて探究しようとしている。
			・アッバース1世によって新都建設や常備軍の設置がなされたことを理解している。 ・ヒンドゥー教徒に対してアクバル帝が融和策を講じたことを理解している。	・サファヴィー朝によるイランのシーア派化を現在につなげて考察している。 ・アウラングゼーブのイスラーム法遵守はヒンドゥー教勢力の反発をまねいたことを考察している。	・オスマン朝との対立によりサファヴィー朝の支配領域に変更があったことを追究しようとしている。 ・イスラームの影響により新しいヒンドゥー教（シク教）が生まれた経緯を追究しようとしている。
第10章 3. 清代の中国と隣接諸地域		・支配が拡大するなか、モンゴルのハーン位やチベット仏教保護者の地位を用い多様な民族の支持を集めたことを理解している。 ・乾隆帝の治世にかけて新大陸の作物導入により国内の人口が増加し辺境の開発が進んだことを理解している。	・朝貢貿易とともに民間人による自由な交易を認めていたことを考察している。 ・銀の流入は17世紀に減少したが、その後イギリスとの茶貿易が盛んとなり増大したことを考察している。	・清朝は華夷一体を掲げ、柔軟な統治を実現したことを追究しようとしている。 ・人口増加は環境破壊をまねき、生活苦におちいった民衆の反乱がおこったことを追究しようとしている。	
		・朝鮮王朝では支配層が両班として固定化していたことを理解している。 ・琉球は中国と日本に両属しながら清朝と朝貢貿易を続けたことを理解している。	・朝鮮王朝は清朝に対しなぜ「小中華」の意識をもっていたかについて考察している。 ・東南アジア各地に中国人の移住が進み、現地で大きな勢力となったことを考察している。	・江戸時代の日本が長崎、対馬、琉球などを通じ近隣諸国と一定の交流を続けていたことを追究しようとしている。 ・スペインとオランダが東アジアに勢力を拡大しようとしていたことを追究しようとしている。	
第11章 近世ヨーロッパ世界の動向 1. ルネサンス		①「主権国家」の特徴をまとめる。 ②同時代のアジア諸地域の大国と比較して、ヨーロッパ諸国の宗教政策の特徴を考える。	・ヨーロッパ人の海外進出のために航海術が進歩する必要がある、それが天文学や地図学の発展をうながしたことを理解している。	・この時代が中世はもちろん、19世紀以降の近代とはなぜ区別すべきなのかについて考察している。 ・軍事革命の進展がどのように近代国家の形成、発達を促進したのかについて考察している。	・イタリア以外のルネサンスについて、宗教改革を視野に入れた探究しようとしている。 ・この時期の科学や技術が現代の生活にどのように結びついているのかについて探究しようとしている。

学習内容	学期	学習のねらい	観点別評価基準		
			知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
第11章 2．宗教改革			・ルターの主張について理解している。 ・カール5世がルター派の動きを抑圧しきれなかった理由について理解している。 ・カルヴァン派の予定説を取り上げ、これが商人や手工業者による富の獲得を正当化したことについて理解する。 ・対抗宗教改革の内容について、15世紀のカトリック教会の姿勢からの変化に着目しつつ理解している。	・プロテスタントの教説を理解するために、比較対象としてのカトリックの教義について考察している。 ・カトリック、ルター派、カルヴァン派が優勢な地域がわかれた理由について、当時の宗教以外の状況から考察している。 ・ザビエルの布教を例に、その布教範囲とポルトガルのアジア貿易ルートを重ね合わせつつ考察している。	・15世紀のフスらの教会への批判が挫折したのに対し、ルターの宗教改革がなぜそうならなかったのかについて追究している。 ・なぜカルヴァン派の教えがこの時期の商人や手工業者に受け入れられたのかについて探究しようとしている。
第11章 3．主権国家体制の成立			・イタリア戦争の背景として、当時のイタリア諸国間の複雑な関係について整理して理解している。 ・ハプスブルク家の領域拡大が、どのような手法により実現したのかについて理解している。 ・主権国家体制が16世紀以降の国際関係のなかで形成され、ウェストファリア条約で法的根拠を得たことについて理解している。 ・ボデンらの主権国家を正当化する理論について理解している。 ・ドイツにおける新旧両教の対立がアウクスブルクの和議後も潜在化し、17世紀に入り再燃して三十年戦争に発展したことについて理解している。	・主権国家の発達の理由として、16世紀以降のヨーロッパ諸国で君主権力がどのように伸張したのかについて考察している。 ・ハプスブルク家を例に、当時のヨーロッパ諸家門にとり血統の維持が課題だったことについて考察している。 ・三十年戦争の結果、どの国が利益を獲得し、反対にどの国が打撃を受けたのかについて考察している。 ・ウェストファリア条約の内容から、この条約がなぜ主権国家と主権国家体制の法的根拠となったのかについて考察している。	・カール5世の個人的属性に焦点を当てながら、ハプスブルク家を軸とする16世紀の国際関係について探究しようとしている。 ・現代国際社会の成立と発展の歴史について考える際に、後期ローマ帝国時代までさかのぼりうることを理解したうえで追究している。 ・この時期に形成された主権国家と現代の国家の関係について探究しようとしている。
第11章 4．オランダ・イギリス・フランスの台頭			・17世紀のオランダの繁栄が海外貿易だけでなく、農業や工業の発展にも支えられていたことについて理解している。 ・17世紀後半の蘭英仏三国の対抗関係を整理しつつ、英の名誉革命においてオランダの動きが重要だったことについて理解している。	・世界地図を思い浮かべつつ、17世紀のオランダの海外進出について表現している。 ・イングランドにおける王権と議会の対立について、他の諸国での君主権力と諸身分の対立と比較しながら考察している。 ・名誉革命で確立した議会王政(議会が主権を事実上掌握)が、主権国家体制の発展の歴史のなかでどのような意味をもつのかについて考察している。	・江戸時代の日本とオランダのつながりを視野に入れたうえで、オランダの繁栄について探究しようとしている。 ・イギリスの議会政治の基本形が18世紀に形成されていたことについて探究しようとしている。
第11章 5．北欧・東欧の動向			・モスクワ大公国からロシア帝国への発展をおさえつつ、17世紀までロシアが独自の世界だったことについて理解している。 ・ウェストファリア条約後にハプスブルク君主国がオーストリアに変質していったことについて理解する。 ・プロイセンとオーストリアの抗争の原因や焦点について理解している。	・プロイセンにおける領主貴族(ユンカー)の地位や役割について、19世紀後半に成立したドイツ帝国を視野に考察している。 ・オーストリアが領土拡大とともに多民族国家となったことについて考察している。 ・17世紀までは優位だったオスマン朝が18世紀に力関係が逆転し、オーストリアやロシアから圧迫された理由について考察している。	・ピョートル1世がなぜ西欧化を推進したのかについて、当時のロシア内外の状況を視野に入れつつ探究しようとしている。 ・東欧三国の専制君主たちがなぜ啓蒙思想に傾倒していたのかについて探究しようとしている。
第11章 6．科学革命と啓蒙思想			・代表的な科学者(ケプラー、ニュートンら)の業績を取り上げつつ、この時期の科学の進歩がなぜ「革命的」だったのかについて理解している。 ・啓蒙思想において克服すべきものとされたヨーロッパの因習を視野に入れつつ、啓蒙思想の内容について理解している。	・17世紀以降の科学革命や合理主義、経験主義思想の発達について、ルネサンス期の人文主義や16世紀における科学技術の発達とどのように関係するのかについて考察している。 ・都市の文化サークルや貴族の館のサロンなどでのブルジョワたちの交流により公論が形成され、政治にも影響を与えたことについて考察している。	・科学革命が表面的な科学の発達にとどまらず、自然に対する理解を根本的にかえたことについて探究しようとしている。 ・ヨーロッパの対外進出と異文化との接触がどのように啓蒙思想に結びついたのかについて探究しようとしている。 ・近代化が進んでも民衆の素朴な文化や慣習が根強く残っていたことについて探究しようとしている。
第12章 産業革命と環大西洋革命 1．産業革命		①イギリスで最初に産業革命が起こった理由を考える。 ②アメリカ合衆国の独立が「革命」と呼ばれている理由を独立に至る経過、独立後の国家体制から考える。 ③18世紀後半のプロイセンやオーストリアで行われた改革がフランス革命に与えた理由を考える。	・イギリスでの農業革命や資本主義農業の拡大が工業労働力を準備し、貿易の発展が国内の資本蓄積をもたらしたことについて理解している。 ・18世紀のイギリスで輸入品である綿織物や鉄の需要が増大し、輸入代替生産をめざす動きが技術革新の背景にあることについて理解している。 ・資本家と労働者の経済的関係が、中世の領主と農民の経済的関係とどのように異なるのかについて理解している。	・18世紀のイギリス各地で有料道路や運河の建設が進められて交通が発達し、単一の国内市場が形成されたことについて考察している。 ・当時のイギリスの農業や貿易の発展が、なぜ工業の発達に結びつくのかについて考察している。 ・急激な工業化と都市化が、労働者の搾取や貧困、感染症の流行など様々な社会問題を深刻化させたことについて考察している。	・産業革命がいかに社会や人々の意識を変化させたかということや、急激な近代化に抵抗する人々の動きがみられたことについて探究しようとしている。 ・産業革命における技術革新の背後に、多くの技師たちの創意工夫が存在していたことについて探究しようとしている。 ・19世紀のヨーロッパにおいて、資本家と労働者の階級社会が形成されたことについて探究しようとしている。

学習内容	学期	学習のねらい	観点別評価基準		
			知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
第12章 2. アメリカ合衆国の独立と発展			・印紙法から始まる英本国と13植民地の対立が、どんな段階を経て決定的となったのかについて理解している。 ・独立戦争で植民地側が軍事的に勝利した要因について理解している。 ・独立後のアメリカで、どのような論争を経て合衆国憲法の制定に至ったのかについて理解している。	・イギリスの植民地政策の転換に対する七年戦争の影響について考察している。 ・アメリカ独立宣言の内容を検討し、背景となる思想や後世への影響について考察している。 ・英語のStateの訳語が、なぜ時期により異なるのかについて考察している。	・北米植民地に対するイギリスの支配について、ジャマイカなど他地域の支配と比較しながら探究しようとしている。 ・アメリカ合衆国の建国の理念がどのように現代に受け継がれ、米国民の考え方に影響しているのかについて探究しようとしている。
第12章 3. フランス革命とナポレオンの支配			・アンシャン=レژیムの構造およびそれに起因するフランス革命への動きについて理解している。 ・フランス革命期の党派がそれぞれどのような支持基盤をもっていたのかについて理解している。 ・ナポレオンの権力獲得、対外征服と没落の過程について理解している。	・アメリカ独立宣言などと比較しながら、人権宣言の意義について表現している。 ・「複合革命」や「大西洋革命」という概念を活用しながら、フランス革命とナポレオン時代について多面的に考察している。 ・ナポレオンが広めたフランス革命の理念がかえって各地での反ナポレオンの動きを誘発したことについて考察している。	・フランス革命の開始からナポレオン時代までの政治体制の変遷について、その複雑さを意識しつつ探究しようとしている。 ・フランス革命とナポレオンの諸政策が、近代国民国家の諸要素を創出したことについて探究しようとしている。
第11章 4. 中南米諸国の独立			・メキシコ、ブラジル等の代表的な国の独立過程について理解している。 ・カナダ植民地に対するフランスとイギリスの関わりについて理解している。 ・オーストラリアとニュージーランドがヨーロッパ人に認識される経緯について理解している。	・ラテンアメリカ諸国の独立においてクリオーリョが果たした役割について考察している。 ・カナダ自治領の形成過程にさかのぼって調べることで、現代のケベック問題について考察している。	・現代のラテンアメリカの抱える諸問題の起源という視点から、19世紀のラテンアメリカ諸国について探究しようとしている。 ・英語圏の拡大という観点から、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの形成について探究しようとしている。
第13章 イギリスの優位と欧米国民国家の形成 1. ウィーン体制とヨーロッパの政治・社会の変動			①民主主義の進展について、アメリカとイギリスの類似点と相違点を考える。 ②アメリカ合衆国で社会主義勢力がそれほど協力にならなかった理由を考える。 ③英・仏の植民地主義の共通点と相違点を考える。 ④この時代、ドイツや日本では「上からの近代化」が推進された理由を考える。	・ウィーン会議で決定された各国の領土変更や植民地の獲得について理解している。 ・1810年代末から1831年まで各地でおこった革命や運動について、自由主義的かナショナリズム的かを分類し理解している。 ・19世紀の循環的不況や、仏での選挙改革運動が二月革命の背景にあったことについて理解している。 ・初期の社会主義とマルクスの社会主義がどのような点で異なるのかについて理解している。	・民主主義の拡大を求めて開始された二月革命が、どのような事情で第二帝政に帰結したのかについて考察している。 ・ヨーロッパにおける政治運動が、1848年2月からどういう経過で拡大伝播していったのかについて表現している。 ・民主主義の拡大を求めて開始された二月革命が、どのような事情で第二帝政に帰結したのかについて考察している。 ・ヨーロッパにおける政治運動が、1848年2月からどういう経過で拡大伝播していったのかについて表現している。
第13章 2. 列強体制の動揺とヨーロッパの再編成			・イタリアとドイツの統一の試み、東欧諸民族の独立や自治権拡大運動の具体的展開について理解している。 ・イタリアとドイツの統一過程について、統一に至る画期がどれかも含めて理解している。 ・クリミア戦争期を中心に、東方問題のなかでのヨーロッパ列強の関係について整理して理解している。	・東地中海地域への進出をめぐる英仏露の思惑の交錯が戦争の背景にあることについて考察している。 ・カヴールやビスマルク等、イタリアとドイツの統一に深く関わった人物の活動について表現している。	・複雑な国際関係の展開について、なるべく整理して探究しようとしている。 ・イタリアとドイツの統一について、19世紀のナショナリズムとの関係から探究しようとしている。
			・後発資本主義諸国がイギリスに対しどのような対抗策を取ったのかについて理解している。 ・イギリスの掲げる自由貿易主義が、貿易相手国や地域に不利な内容だったことについて理解している。	・従属諸地域が資本主義諸国に富を奪われたことについて考察している。 ・パクス=ブリタニカ時代のイギリスの発展とアイルランド問題の顕在化が同時に進行したことについて表現している。	・当時の世界経済の構造と分業体制について、俯瞰的視点から探究しようとしている。 ・19世紀のイギリス社会の変化について、階級分化という視点から探究しようとしている。
第13章 3. アメリカ合衆国の発展			・二大政党制や猟官制などの現代アメリカ政治の特徴が、ジャクソン大統領時代に発達したことについて理解している。 ・奴隷制度をめぐる南北対立がどのように推移したのかについて理解している。 ・人口や経済力などの面で南北の格差がどの程度だったのかについて理解している。	・アメリカ合衆国の先住民が苦境に追いやられていったことについて考察している。 ・アメリカ合衆国ではヨーロッパ諸国と異なり、なぜ社会主義が拡大しなかったのかについて考察している。	・民主主義の典型とされるアメリカ合衆国の政治制度等がどのように発達したのかについて探究しようとしている。 ・南北戦争の原因や後世への影響等について、現代の合衆国の抱える諸問題と結びつけて探究しようとしている。

学習内容	学期	学習のねらい	観点別評価基準		
			知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
第13章 4. 19世紀欧米文化の展開と市民文化の繁栄			・代表的な科学者や芸術家の成果を挙げつつ、この時代の科学や芸術の発達について理解している。	・この時期の科学技術の発達が第2次産業革命の要因となったことについて考察している。	・現在の学問諸分野が、この時期の科学の発展のなかで確立したことについて探究しようとしている。
第14章 アジア諸地域の動揺 1. 西アジア地域の変容		①オスマン朝、エジプト、清、日本の近代化改革を比較し、共通点と相違点を考える。 ③アジアの抵抗運動の理念は様々な価値観から形成されたが、その観点から、各地の抵抗運動を比較して考える。 ②ヨーロッパ諸国の植民支配がインドと東南アジアに与えた影響を考える。	・オスマン朝からの自立をめざしていた民族や地域を地図を使って確認し理解している。タンジマートの特徴や結果について理解している。 ・ワッハーブ運動の特徴と、エジプトの近代化の展開について理解している。ウラービー革命とその結果について理解している。 ・ガージャール朝やアフガニスタンに対する列強の圧迫の内容について理解している。	・ナショナリズムの高まりによる諸民族の自立運動に対し、オスマン朝がどのように国家の統一維持をはかろうとしたか考察している。 ・ワッハーブ派の運動とエジプトの近代化を比較して考察している。 ・イランやアフガニスタンに対するロシアやイギリスの圧迫が、両国のどのような利害にもとづいておこなわれているのか考察している。	・オスマン朝とエジプトの近代化、両国の列強への従属について、世界の一体化へ向けてのヨーロッパ諸国の展開と関連づけて探究しようとしている。 ・ワッハーブ運動とエジプトの近代化を比較して、それぞれの「西洋の衝撃」への対応の違いを理解しようとしている。 ・「財務管理」や「不平等条約の締結」など、この時期の列強のアジアへの進出の特徴について探究しようとしている。
第14章 2. 南アジア・東南アジアの植民地化			・イギリス東インド会社によるインド植民地化の過程を地図を使って確認できている。インド大反乱とその後のイギリス政府による直轄支配の流れを理解している。 ・列強による東南アジア植民地化について地図を使って確認し、植民地支配の内容を理解している。	・イギリスによる支配によって、インドの社会や経済にどのような変化がおこったのか、コラム・グラフ等を使って考察している。 ・列強による植民地化によって、東南アジアの経済にどのような変化が生じたのか考察している。	・現在インドが抱えるカーストや宗教間の対立について、イギリスの植民地支配との関係で探究しようとしている。 ・現在の東南アジアの国境や経済について、列強による植民地支配との関係で考察しようとしている。
第14章 東アジアの激動			・三角貿易の内容と、三角貿易が中国の社会や経済に与えた影響について理解している。 ・南京条約や北京条約、アイグン条約の内容を地図を使って理解している。 ・太平天国の乱や洋務運動の内容や特徴を理解し整理することができる。 ・朝鮮の政変に清朝や日本がどのように関わっているのか理解している。朝鮮をめぐる日清の対立が日清戦争につながったことを理解している。	・南京条約や北京条約が、清朝の伝統的な対外政策に与えた影響について考察している。 ・太平天国の特徴やおこった場所について、アヘン戦争後の中国の状況と関連づけて考察している。 ・洋務運動の特徴について、明治維新との比較で考察している。 ・朝鮮半島の政変が清と日本の対立とどのように関係しているか考察できている。日清戦争後の朝鮮半島の地位や朝鮮をめぐる日露間の対立について考察している。	・清朝の朝貢体制の崩壊について、第2節の清仏戦争の展開もふまえながら探究しようとしている。 ・イギリスの対外進出のパターンについて、西アジアとインド、東南アジア、中国の場合を比較して探究しようとしている。 ・明治維新と洋務運動、タンジマート、エジプトの近代化の共通点や相違点について整理し19世紀のアジアの民族運動の特徴について探究しようとしている。
定期考査	2				
第15章 帝国主義とアジアの民族運動 1. 第2次産業革命と帝国主義	3 学期 (1 6)	①帝国主義政策には国民の協力が不可欠であり、欧米の政府は国民の要求にある程度妥協していった。英、仏、独、米が国内の民主化や社会制度を進展させた方法を考える。 ②1870年代から20世紀初頭にかけて、ヨーロッパ諸国、アメリカ合衆国、日本の同盟関係の変化をまとめる。	・第2次産業革命が、アメリカ・ドイツを中心に、石油と電力を動力とし重工業中心に始まったことを理解している。第2次産業革命の開始により、独占資本が成長し全国的な労働運動が活発化したことを理解している。 ・19世紀末の社会主義運動の特徴が、国によって多様化していることを理解している。	・18世紀後半に始まる産業革命と第2次産業革命の違いについて考察している。 ・イギリス・ドイツ・フランスの社会主義政党と、ロシアの社会主義政党の性格の違いがどこからくるのかについて、考察している。	・13章で学んだ科学技術の発達と、第2次産業革命の動力や中心産業、万国博覧会で注目された技術のつながりについて探究しようとしている。 ・19世紀末から20世紀初頭の労働者の生活状況について調べ、政府や社会主義政党が労働者にどのような働きかけをしていたか探究しようとしている。
第15章 2. 列強の世界分割と列強体制の二分化			・19世紀末から20世紀初頭の西欧諸国の国内状況について理解している。ロシアの革命運動とアメリカ合衆国の帝国主義政策の展開について理解している。 ・列強のアフリカにおける勢力圏と、列強の対立について地図を使って理解して整理することができる。 ・19世紀末から20世紀初頭の国際関係の変化について具体的な同盟や協商の名前をあげながら理解している。	・ヨーロッパ各国の社会主義運動や国民の政治参加の拡大、政府の社会福祉政策の拡大について整理して考察している。 ・アフリカにおける各国の対立が、19世紀末から20世紀初頭の国際関係に与えた影響について考察している。 ・イギリス・フランス・ロシアが、ドイツの進出に対しどのように協調して対抗していったのか、地図を使って考察している。	・イギリスの議会政治の歴史やフランスの政体の歴史について、過去に学んだものを含めてまとめ、探究しようとしている。 ・コラムを参考に帝国主義についての様々な学説について調べ、実際の各国の対外進出と比較し探究している。

学習内容	学期	学習のねらい	観点別評価基準		
			知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
第15章 3．アジア諸国の変革と民族運動			<ul style="list-style-type: none">・アブデュルハミト2世が憲法を停止して専制政治をおこなったが、青年トルコ人による革命で立憲政治が樹立されたことを理解している。・英露によるイラン進出とガージャール朝による政治・経済政策に対して、タバコ=ボイコット運動やイラン立憲革命がおこったことを理解している。・インド国民会議がベンガル分割令を機に反英民族運動を展開したことを理解している。・東南アジアで現地知識人層を中心に民族運動が活発化したことを理解している。・日清戦争後の列強の中国の勢力範囲を理解している。・日露戦争の展開と、戦後の朝鮮への日本の進出の展開を理解している。・光緒新政の内容と、辛亥革命の展開と革命後の中国の政治状況について理解している。	<ul style="list-style-type: none">・オスマン朝で採用された、パン=イスラーム主義とパン=トルコ主義の共通点と相違点について考察している。また、パン=トルコ主義がオスマン朝の統治に与えた影響について考察している。・イランの、タバコ=ボイコット運動に影響を与えた思想やイラン立憲革命に影響を与えたできごとについて考察している。・インドや東南アジアで民族運動を指導した人々の共通点について考察している。・朝鮮半島をめぐる対立の推移について、第14章の内容もふまえて考察している・戊戌の変法と光緒新政の内容を、洋務運動と比較して考察している。	<ul style="list-style-type: none">・パン=イスラーム主義の影響を受けた運動や人物を、第13章と第14章から探し、運動の内容やめざした事柄について探究している。・インドや東南アジアの民族運動を指導した人物について具体的に調べ、この時期の民族運動の指導者や運動の特徴について探究している。・孫文の生涯や革命運動について調べ、留学生や華僑が中国の民族運動に与えた影響について探究している。・辛亥革命の際、チベットやモンゴルなど清朝の藩部がどのような動向をとったのか探究している。
第16章 第一次世界大戦と世界の変容 1．第一次世界大戦とロシア革命		①ヴェルサイユ体制がウィルソン大統領の意図と異なる形で構築された理由を考える。また、アメリカ合衆国がワシントン体制を構築した意図を考える。 ②第一次世界大戦前から戦後にかけて帝国国家が崩壊したが、その後、帝国の休止は医療域で起こった政治変動をまとめる。	<ul style="list-style-type: none">・第一次世界大戦勃発のきっかけとなった事件やおもな戦い、戦争の長期化による新兵器の登場や総力戦について理解している。・戦争中の秘密外交やウィルソンの十四カ条の内容、戦争の終結への流れを理解している。・二月革命と十月革命の特徴と、ソヴィエト政権の方針、欧米諸国の革命への対応について理解している。・ヴェルサイユ体制の特徴について、重要な条約の内容をふまえて理解している。	<ul style="list-style-type: none">・塹壕戦や新兵器の開発、植民地の動員について、第一次世界大戦が長期化したことと関連づけて考察している。・第一次世界大戦中の秘密外交が、現在の国際社会の諸問題にどのように関連しているか考察している。・ロシア革命において、中心的役割を担った階級や組織の移り変わりについて考察している。・国際連盟の意義や、民族自決原則が戦後の国際政治に与えた影響について考察している。	<ul style="list-style-type: none">・コラムなどを使って、総力戦体制のもと各国はどのような政策をとり、総力戦体制が戦後の政治・社会にどのような影響を与えたのか探究しようとしている。・ロシア革命が、欧米諸国やアジア諸国でどのように受け止められたのか、具体的に探究しようとしている。・ウィーン体制やビスマルク体制、ヴェルサイユ体制の特徴をまとめ、19世紀以降のヨーロッパの国際体制の共通点や相違点について探究しようとしている。
第16章 2．ヴェルサイユ体制下の欧米諸国			<ul style="list-style-type: none">・ワシントン体制に関連する条約の内容や、アメリカ合衆国とヨーロッパとの経済関係を理解している。・自動車やラジオ放送など大衆消費社会の具体例を理解している。女性参政権の保障など民主化が進む一方、WASPの価値観のもと社会の保守化が進んだことを理解している。・イギリスでの労働党政権の成立やイギリス連邦の成立、フランスの対独外交の展開、イタリアのファシスト党成立の展開について理解している。・ドイツの混乱と安定、ソヴィエト政府の経済政策の展開について理解している。	<ul style="list-style-type: none">・ワシントン体制やドーズ案について、その後の日本の対外進出や世界恐慌との関係で考察している。・アメリカ合衆国の大衆化や移民の増加が、WASPの価値観とどのような点で合致しないか考察している。・第一次世界大戦の結果が、イギリスの政治の大衆化やフランスの対独外交、イタリアのファシズムの成長に、どのような関わりがあるのか考察している。・戦後の国際関係の変化のなかで、ドイツやソヴィエト政権の国際的地位がどのように変化したか考察している。	<ul style="list-style-type: none">・ロシア帝国やオーストリア=ハンガリー帝国崩壊後、帝国の旧支配領域でどのような政治変動があったのか、探究しようとしている。・第一次世界大戦後の政治や文化の大衆化が、アメリカやイギリス、イタリアでどのようなかたちをとったのか、探究しようとしている。・1920年代のヨーロッパ各国のできごとが、戦間期のヨーロッパ全体の国際関係の変化のなかでどのような意味をもつのか探究しようとしている。

学習内容	学期	学習のねらい	観点別評価基準		
			知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
第16章 3. アジア・アフリカ地域の民族運動			<ul style="list-style-type: none"> トルコ共和国の改革の内容を理解している。イランではパフレヴィー朝が成立し、アフガニスタンは立憲君主制の樹立が試みられたことを理解する。 イギリスとフランスの委任統治領について地図を使って理解している。イブン=サウードの指導でサウジアラビア王国が成立してことを理解する。 ガンディーやネルーの民族運動の方針や実際の活動内容を理解している。 東南アジアの民族運動の主体となった組織や人物について理解している。 文学革命の担い手や影響を受けた社会階層について理解する。 三・一独立運動とその後の朝鮮総督府の統治方針の転換、中国の五・四運動の背景について理解している。 国民党と共産党の協調と対立の展開について理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> トルコ共和国の改革について、それまでのイスラーム諸国の改革との比較で考察している。 パレスチナ問題の起源について、フサイン・マクマホン書簡やサイクス・ピコ協定の内容をふまえて考察している。 ロシア革命が東南アジアや中国の民族運動に与えた影響について考察している。 五・三〇運動や張作霖爆殺事件が、北伐の展開にどのような意味があったのか、考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書で学んだことをふまえて、現在のトルコ共和国とサウジアラビア王国を中心にイスラーム諸国の政治状況について探究しようとしている。 独立後のエジプトやイランが、西欧諸国に従属していた部分と、従属からの解放の動きについて探究しようとしている。 コラムの内容をふまえて、ロシア革命やアジアの経済成長が、第一次世界大戦後の民族運動に与えた影響について探究しようとしている。 第15章や第16章の内容をふまえて、孫文の革命運動の変化について探究しようとしている。 コラムの内容をふまえて、日本や欧米諸国の植民地統治の特徴について探究しようとしている。
第17章 第二次世界大戦と新しい国際秩序の形成 1. 世界恐慌とヴェルサイユ体制の破壊		①アメリカ合衆国で株式相場の暴落がおこった原因について考える。 ②世界恐慌に直面した各国が経済ブロックを形成利他理由を考える。 ③1941年は第二次世界大戦においてどのような意味を持つか考える。 ④第二次世界大戦がアジア諸国が独立する契機となった理由を考える。	<ul style="list-style-type: none"> 世界恐慌の原因を多角的に把握し、欧米諸国と日本がどのようにして世界恐慌に対応していったかをブロック経済・ファシズムの観点から理解し、整理できる。 ミュンヘン会談を宥和政策の中心としてとらえ、そこに英・仏の根深い対ソ不信があったことを理解している。 絵画「ゲルニカ」の写真から、ピカソがこの作品で世界に訴えたかったことを読み取っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 第二次世界大戦がもっていた複合的で複雑な性格を、俯瞰的にとらえ、それを考察している。 ファシズム国家のドイツ・日本が戦争中におこった占領政策の違いについて考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> 1930年代における各国の動向を、政治的な側面ばかりでなく、国民の生活に焦点をあてて考察しようとしている。 満洲事変・日中戦争など日本の大陸進出について、「15年戦争」という日本史的な視点から探究しようとしている。 日本が戦争を回避できた可能性について、深く考察しようとしている。
第17章 2. 第二次世界大戦			<ul style="list-style-type: none"> 地図「第二次世界大戦(ヨーロッパ戦線)」と「太平洋戦争」から戦線の拡大を、写真「ヤルタ会談」より戦後世界における米・ソの覇権争いを読み取ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 第二次世界大戦がもっていた複合的で複雑な性格を、俯瞰的にとらえ、それを考察している。 ファシズム国家のドイツ・日本が戦争中におこった占領政策の違いについて考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> 強制収容所でのユダヤ人迫害や核兵器の使用といった残虐行為など戦争の惨禍に関心を深め、その原因について探究しようとしている。
第17章 3. 新しい国際秩序の形成			<ul style="list-style-type: none"> 国際連合による新しい集団安全保障と新しい国際経済体制であるブレトン=ウッズ体制の特質を具体的に理解し、整理できる。 建国から文化大革命までの中華人民共和国の動向を、系統的に整理できる。 朝鮮戦争とインドシナ戦争の本質を理解し、構図化できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 東西冷戦の象徴であるベルリン問題を系統的に把握し、その背景について考察している。 アジア諸国の独立について、旧宗主国の干渉、宗教対立などの視点から多角的に考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> 冷戦によって分断された朝鮮半島とドイツの住民がたどった苦しみの歴史に思いを寄せて、より深く学ぼうとしている。 アジア諸国の独立について、帝国主義との対立に根付いていることを考察しようとしている。
第18章 冷戦と第三世界の台頭 1. 冷戦の展開		①第三世界が国際連合に大きな影響を与えた方法を考える。 ②イスラエル建国に至るシオニズムの動きをまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> 「ブラハの春」から東欧諸国の反ソ意識について、まとめることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 公民権が何を意味するか考察している。 ブラハの春の弾圧が、中国の外交に与えた影響を考察することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ソ連と東欧、ソ連と中国の連携や対立に目を向けることができる。
第18章 2. 第三世界の台頭とキューバ危機			<ul style="list-style-type: none"> 第2次中東戦争以降のパレスチナ問題とイラン=イスラーム革命についての基本的知識を身につけている。 	<ul style="list-style-type: none"> 西アジアにイスラーム原理主義が台頭した原因について考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> 「中東戦争によるイスラエルの領土拡大」を参考に、パレスチナ難民の生活に目を向けている。
第18章 3. 冷戦体制の動揺			<ul style="list-style-type: none"> ベトナム戦争の本質を理解し、構図化できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ベトナム民主共和国建国からベトナム戦争の終結に至る過程で、フランス・アメリカ合衆国がどのようにインドシナに介入したかを、時間軸で考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ベトナム戦争がアメリカ社会に与えた影響を、公民権運動や反戦運動の高まりをふまえながら探究しようとしている。
第19章 1. 産業構造の変容		①石油危機の背景と世界経済に与えた影響を考える。	<ul style="list-style-type: none"> 石油危機とドル危機による国際経済体制の転換を、欧米諸国の政策を比較することにより理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> アジア・ラテンアメリカ諸国に開発独裁の政権が形成された背景について考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> 韓国の朴政権がとった政策が、日本との関係に与えた変化について探究しようとしている。
第19章 2. 冷戦の終結		①ゴルバチョフ政権が冷戦の終結に向かった理由を考える。 ②冷戦の終結が世界各地での宗教・民族紛争の要因となった理由を考える。 ③EUが発足するまでの過程をまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> 湾岸戦争後のアメリカとイスラーム地域との対立が、同時多発テロの背景にあることを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> 同時多発テロ以降の「テロとの戦い」が、世界的な問題になっている理由について考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> 「テロとの戦い」がイスラーム原理主義勢力の過激化をまねいたことに関心をもっている。

学習内容	学期	学習のねらい	観点別評価基準		
			知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
第19章 3．今日の世界			・チェチェン紛争・クリミア併合でのプーチン政権の強硬策とその背景について把握している。	・アフリカ・ラテンアメリカ・アジア地域における経済的諸問題の原因について考察している。	・コラムをもとに今後のグローバルに展開する現代社会を考えている。
第19章 4．現代文明の諸相			・エコロジーの思想が地球環境の破壊と関連して生まれたことを理解している。	・I T革命の進展とサイバー攻撃などの問題について多角的に考察している。	
定期考査	1				